第6章

ジェンダーと科学

小川 眞里子　ogawa@human.mie-u.ac.jp
三重大学人文学部 教授

プロフィール

1971 年東京大学基礎科学科卒業、1974 年同理学系大学院科学史科学基礎論修士課程修了、1978 年同人文系大学院比較文学比較文化博士課程中退。専門は 19 世紀の生物学史・医学史で、舞台はイギリスとドイツ。進化論の文化的哲学的側面に関心をもつ。医学史は、衛生政策と政治の関わりを追っている。近年は「ジェンダーと科学」研究にも力を入れている。2003 年からお茶大 COE「ジェンダー研究のフロンティア」客員研究員。トヨタ財団の助成を受けて「アジアにおける女性科学者・技術者のネットワーク」を今年から始めることになった。

1. 見ること、観察すること

本章ではジェンダーと科学に関連して、男らしさや女らしさが科学にどのように反映しているかという点を考えてみたい。

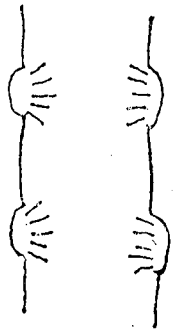
人間は、これまで見たことのない新しいものに出会うと、過去の体験に照らし合わせて考えようとする。そして見えない部分にも想像を働かせて、可能な限り合理的な解釈をしようとするものである。

たとえば、次のような図から何を想像されるだろうか。これは科学哲学者ノーウッド・N・ハンソンが示した有名な絵(【図 1】)だが、これを見て、木の向こう側から熊がしがみついている場面といった答えをする人少なからずいる。この絵には、何も描かれていないのに、中央部分を木に見立て、木の背後に熊やコアラを想像するのである(【図2】)。このように人間には、網膜に映っていないものであっても、補って考えるほうが合理的に思える場合は、視覚が捉えている以上のものを見ようとする脳の働きがある。

「老婆と娘」や「ネッカーの立方体」のようなだまし絵では、すでに視覚

に捉えられたパターンのどこにポイントを置くかによって、老婆に見えたり若い女性に見えたり、立方体を見る視点が変化する事例だが、ハンソンの事例は、見えない部分も補って見るという人間の習性を巧みに示している。

【図1】ハンソンの絵①

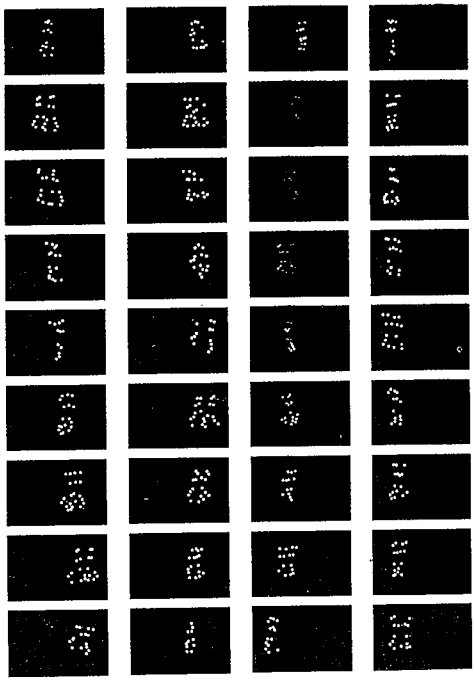


【図2】ハンソンの絵②

次に【図３】では、じっと見ていると、２人の人物がダンスをしているシーンが浮かび上がってくるだろう。実はこれは、身体に数個の豆電球を装着した２人の人物が、暗闇でダンスしているところをコマ撮りしたものである。人によっては、点の動きを追うだけで、ステップに合うダンス音楽すら聞こえてくるという。人間は幼少時から人の動きを眺める経験を無数に蓄積しており、人間の動作の特徴が脳の中にインプットされている。だから、点だけのコマ撮りでも連続的な動きとして見ることができるのである。

ガリレオは17世紀初めに、木星の衛星を観察して詳細なノートをつけた。当時は現代のように精巧な望遠鏡があるわけではなく、しかも地球も木星も動いている。木星近傍の星を観測することによって、ガリレオはそれら４つの相互関係から、それぞれが木星の周囲を回転する衛星だと考えた。衛星が木星の周囲を回っていることは、はるか上方から鳥瞰でもしない限り円運動の観察は不可能だ。彼は、天体で円運動する物体を横から見たときにどのよ

【図3】暗闇でダンスする2人



うな動きをするかという点について、非常に習熟していた。だからこそ、木星の衛星も発見できたと言えよう。

実際に、ガリレオの木星の衛星観測図に彼の指示どおりに、20世紀の研究者が番号をふってみると、彼の推測がきわめて正確であったことが明らかになった。根気強い観察はもちろん不可欠だが、円運動する物体を横から眺めたときの運動の様子に習熟していたガリレオだからこそ発見が可能だったと言えよう。

このように、科学は必ずしも観察した結果からそのまま理論が組みあがるわけでなく、相当な想像力や思い入れが含まれている。そこにジェンダーが入り込む余地もある。

われわれの眼の網膜には、片目で100万本もの視神経が来ているという。

しかしこれはいわば100万画素数くらいの精巧度であり、精密な電子機器に比べればかなり荒い。そのような網膜で三次元の動画の世界を見ているので、想像で相当補っていると考えられる。われわれは物体の輪郭をなめらかに認識しているが、これも見るという訓練をしていなければできない。だから、目が見えなかった人が突然見えるようになっても、われわれの生活空間をすぐに十全に認識することはできないと言われている。

つまり、見るということは解釈することも含んでおり、解釈の仕方によって見え方も変わってくるということだ。われわれは、網膜に映る以上のものを観察し、たえずそれに解釈を加えているのである。そこにジェンダーの入り込む余地があり、科学的な観察といえども、決して一律に決まらない訳がある。事実は、誰が見ても同じであると思われるかもしれないが、誰がどういう立場や状況で観察するかによって違ってくるのである。

2. 科学知識とジェンダー

2.1. 骨格の女らしさ・男らしさ

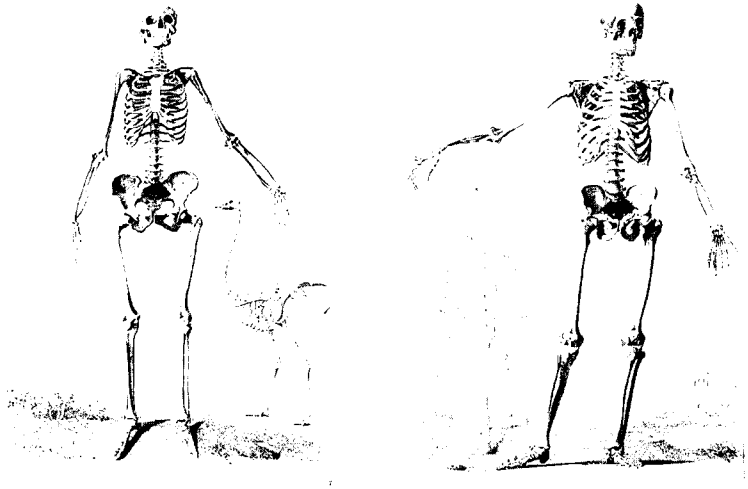
ベルギーの出身のアンドレアス・ヴェサリウスは、イタリアのパドヴァで医学教育に携わる一方、1543年に『人体の構造』という書物を出版し、その中に幾枚もの骨格図を掲載している(ちなみに1543年は、コペルニクスの『天球の回転』が出版され、日本では、種子島に鉄砲が伝来した年である)。また彼は、人体模型を医学教育に用いているが、骨格自体は男女共通にしておいて、性器部分だけ取り外し可能なパーツを作って指導していたようだ。

このように、ヴェサリウスに代表される16世紀半ばの骨格図は特に男女を区別していないが、18世紀に入ると骨格図も様相が変わってくる。当時の骨格図を2枚並べてみよう(【図4】)。左が女性、右が男性である。女性は、大きめの骨盤、狭い肩幅など、骨になっても女らしく描かれている。

さらに、それぞれの骨格図の横に描かれている動物に注目してほしい。それぞれの性を象徴するのにふさわしい動物として、男性の横には馬、女性の横にはダチョウが描かれている。当時はまだ類人猿の知識は十分なく、人間

に次ぐ知的動物は馬とされていた。『ガリバー旅行記』にも、ガリバーが馬の国に出かけて行く一話があり、馬が知的な会話をしている場面が描写されている。戦場で騎士と苦楽をともにするという意味でも、男性骨格の象徴はサラブレッドでなければならなかった。

【図4】動物とセットの骨格図（左：女性、右：男性）



それに対して女性骨格の象徴として描かれているダチョウは、現存生物中もっとも大きな卵を産む動物である。女らしい骨格として、子供を産むための大きな骨盤が非常に重要な意味をもっていた。さらに、足元を男女の骨格で見比べると、女性の方はハイヒールを履いていたままの形を保ちエレガントである。服装や肌ではなく、最も本質的とされる骨になってもジェンダーが描きこまれている点に注意したい。実際、この女性骨格図は本来の骨盤寸法よりやや誇張して描かれていると言われている。骨格を観察して図を描くなら、いつの時代であれ誰が描こうが同じと思われがちであるが、ジェンダーの入り込む余地がかなりあることが分かる。

2.2. 類人猿の女らしさ

動物園で動物を見ても、オス、メスをはっきり区別できるのはクジャク、ライオンなど決して多くない。その他の動物についても、女らしいからメス、男らしいからオスなどとは考えないが、18 世紀の人々にとって、メスであればすべて慎み深さを体現していると考えられていたため、動物の描かれ方もきわめて女っぽいものであった。その時代の人には、そう見えていたに違いないのだろう。これも観察にジェンダーが投影されている例である。

【図５】はニコラス・テュルプが描いたオランウータンのメスで、視線を落として手を前に組み、当時の女性の重要な徳目である、慎み深さを体現している。また【図６】はビュフォンの『博物誌』に登場するオランウータンであるが、横座りしている姿勢や、長い手指が女らしい。18 世紀の人々に、メスは確かにそう見えていた。作為的にではなく、まさにその時代の人にはそう見えたから、そのまま描いたということだろう。このように 18 世紀頃から、女らしさと男らしさが顕著に意識されて描かれるようになる。

【図5】慎み深いオランウータン

【図6】横座りのオランウータン

2.3. 精子の男らしさ、卵子の女らしさ

動物の個体ならオスの男らしさ、メスの女らしさはある程度理解できるが、受精の場面でも、ジェンダーが込められる。1930年代頃から近年まで、人間の精子と卵子の出会いの描き方は、精子は勇猛果敢に戦う兵士のごとく幾多の困難を乗り越えて卵子にたどりつき、卵子は慎み深く淑やかに精子の訪れを待つというように、ステレオタイプ的であった。細胞である精子や卵子に男らしさ、女らしさという区別はないはずであるが、かなり男らしさ、女らしさが吹き込まれた記述がなされてきた。

それについてアメリカの人類学者エミリー・マーチンは、「卵子の描かれ方は、まるで王子のキスをひたすら待つ眠り姫のごとくだ」と指摘している。近年は、受精場面における卵子の積極的な働きが明らかになってきており、様相がやや違ってきたが、つい最近までそんな描かれ方であった。

このように、骨格図、類人猿の絵、精子と卵子の描写などに、時代のジェンダーが投影されていることに気づいていただけることだろう。

3. 「哺乳類」という命名について

3.1. 分類の恣意性

「哺乳類」という日本語ではあまりピンとこないが、原語はラテン語のママリア(*Mammalia*)である。ママ(mamma)は“乳房”で、母親を指すほとんど万国共通語に近い。したがって、*Mammalia*を直訳すれば、端的に「乳房類」である。しかし「乳房類」は、脊椎動物の分類名として、魚類、両生類、爬虫類、鳥類などに比べると、やや異質である。*Mammalia*は18世紀半ばに作られた比較的新しい分類名であるが、すでに定着しており今後とも変わることはないだろう。なぜ、このような奇妙な分類名がついたのだろうか。

リンネが*Mammalia*という分類名を提唱したのは、1758年のことであるが、実は、乳房に着目した分類名は、学術的な必然性からというより恣意的であったと言ってよい。それというのも、現在哺乳類の特質として知られているのは、乳腺があるということに加え下記のような特質があり、これらのいず

れを分類の指標にしてもよい。ちなみに日本語のケモノ（毛もの）は「体毛または毛皮」に着目した呼び方で、哺乳類全体の特質をあらわしている。

- mammary gland（乳腺）
- 側頭鱗と歯骨によって形成される額関節
- 鼓膜と内耳をつなぐ３耳骨（槌骨、砧骨、鐙骨）
- 体毛または毛皮
- 体循環に左大動脈弓のみ（２心房、２心室）
- 歯根が分岐している臼歯

このうち、mammary gland（乳腺）の存在を哺乳類の指標にしたのは、すべての哺乳動物が乳房（mamma）を持っているわけではないからだ。たとえばカモノハシは、乳房はないが乳腺はある。リンネの時代に、カモノハシはまだヨーロッパに入っていなかったので、彼がそれを知らなかったのはやむをえないが、哺乳類全体を括れる項目が他にあるにもかかわらず、なぜ「乳房類」という奇妙にジェンダー化された名称になったのか。それ以前は、アリストテレス以来ずっと、動物には四足動物という分類群が存在した。そうすると卵を産むトカゲやワニも入り都合がよくないし、クジラやコウモリの存在も無視しにくい。四足動物に代わる合理的な分類名を考えようとして、結局*Mammalia*が選ばれたのである。

3.2. 乳母制度廃止キャンペーンとの連動

*Mammalia*という分類名が選ばれた過程は、18世紀の乳母制度と深く関係していた。当時ヨーロッパでは乳母制度が非常に普及し、パリで１年間に生まれる２万人ほどの新生児の大半が、田舎の乳母に預けられ、母親のもとで育てられるのは、わずか1000人程度であったという。ロンドンでも事情は似たようなものであった。

当時は裕福な家庭だけが子どもを乳母に預けるのではなく、生活のために女性も働かなくてはならず、一般家庭でも子供を自分で育てる習慣がなく、

乳母に頼ることを当然としていた。少子化で子供が大切に育てられている今日では信じられない制度であるが、キリスト教社会では避妊は禁じられており、次々と妊娠出産すれば、やむをえず乳母を頼ることになった。そして、預け先は都市の郊外や田舎にあるため、いったん預けてしまうと数年はそのままになってしまい、栄養不足による乳児死亡率はきわめて高くなっていた。

18世紀後半、政府は、産業革命以降の労働人口確保のために、乳児死亡率を低下させる政策に乗り出すこととなった。おりしもリンネが *Mammalia*(「乳房類」)という分類名を提案していたので、その分類名を採用することによって、われわれ人間も「乳房類」の一員であることを強調し、子どもは乳母に預けるのではなく、他の「乳房類」のメス同様、自分の母乳で育てるべきだというキャンペーンが展開することになった。ルソーやキャドガンなど当時の思想家や医師が運動を推進し、*Mammalia* は社会的な公認を得ることとなった。いくら博物学者であるリンネが、*Mammalia* という分類名を提唱したとしても、社会的な支持がなければ定着は難しい。18世紀後半から19世紀にかけて、乳児死亡率減少のために乳母制度を廃止し、女性は自分の子どもを母乳で育てるべきだとする社会的期待と分類名とが合致して、*Mammalia* が支持されるようになったのであろう。

Mammalia は、動物学的な正しい観点から名づけられた分類名ではない。科学的と思える命名にも社会的な要素が入り、また男性、女性の役割が反映された例である。

4. 女性研究者を取り巻く環境

4.1. ノーベル賞科学分野における女性受賞の歴史

ノーベル賞が創設されてから百余年になるが、科学分野の受賞者のうち、女性は何名いるかご存知だろうか。1903年、1911年と2度にわたって受賞したマリー・キュリーは誰でも知っているが、それ以外はほとんど知られていない。1935年にマリーの娘イレーヌ・ジョリオ=キュリーが夫とともに化学賞を、1947年にガーティ・コリがやはり夫とともに医学・生理学賞を受賞して

いる。彼女たち３人は、いわばノーベル賞第一世代である。

続くノーベル賞第二世代は、1963年に物理学賞を受賞したマリア・メイヤー、1964年に化学賞を受賞したドロシー・ホジキン、1977年に医学・生理学賞を受賞したロザリン・ヤーロウの３人である。それ以降の第三世代となる、1983年のバーバラ・マクリントック、1986年のリタ・レヴィ=モンタルチーニ、1988年のガートルード・エリオンは、そろって80年代に医学生理学賞を受賞している。この後、ドイツとアメリカで女性が受賞したので、現時点では11人、またマリー・キュリーが２度受賞しているので、メダル数は12個である。

ノーベル賞受賞女性の研究の歴史をたどってみると、興味深い事実が見えてくる。第一世代である最初の３人（マリー・キュリー、キュリーの娘イレーヌ、コリ）は、いずれも夫とともに受賞しているという共通点がある（マリーの２度目は単独）。当時はまだ、女性が単独で科学研究をしてノーベル賞を受賞する時代ではなかった。しかも、この３人の時代には女子の高等教育も整備されておらず、全般的に女性の教育レベルは低かった。高等教育を受ける前に花嫁修業をして、その上で外国に出て勉強するなど、決して研究に専念できる環境ではなかった。ノーベル賞に限らず、全般的になぜ女性研究者が少ないのか。その最大の理由は、女性に才能がないからではなく、過去においては教育と研究の機会に恵まれなかったからである。

またかつては天才神話がかなり浸透しており、天才であるからには、男性であれ女性であれ、いかなる逆境にあっても、それらを乗り越えて才能を発揮するはずだと信じられてきた。しかし、どんなに優れた才能の持ち主であっても、その才能を愛で、励まし、育てようとする環境なくして、才能の開花はありえない。励まし育てられなければ才能はしだいに凡庸になり、天才が自ずから出てくることはありえないのである。そういう意味で、男の子に関しては親や社会が期待し、才能の持ち主がさらに資質を磨いていけるが、女の子はそもそも期待されていないという状況が大きく影響していると考えられる。女性の天才が少ない理由は、個人の才能の問題より、教育、研究の機会など社会的な問題として考慮されるべきである。

それゆえにマリー・キュリーが科学部門でノーベル賞を２度も受賞したのは、実に稀有なことである。そのマリーですら、1911年にフランス科学アカデミー会員にノミネートされながら、僅差で落選している。フランス科学アカデミーは1666年に創立されているが、マリーもその娘のイレーヌも正会員にはなれず、1979年になってようやく女性の正会員が誕生した。イギリスの王立協会は1660年に創立されて以来、男性の会員だけでずっと維持され、女性の正会員の受け入れは1945年になるまで待たなければならなかった。その第１号は、キャサリン・ロンズデールという結晶学者であった。

ロンズデールを育てたのは、1915年にノーベル賞を受賞したW. H. ブラッグである。ブラッグは彼の息子とともにフェミニストとして知られ、18人の弟子のうち11人が女性であった。彼らは、育てようという気があれば優れた女性研究者は育つということを実例をもって示した。ブラッグが育てた女性の弟子の１人がキャサリン・ロンズデールであり、さらに彼の一番弟子であるバナールもその精神を引継ぎ、イギリス初のノーベル賞受賞女性ドロシー・ホジキンを育てた。ロンズデールやホジキンと並んで、ロンザリンド・フランクリン（DNA のX線結晶解析）もイギリスを代表する優秀な女性研究者であった。今日でも結晶学で活躍する女性研究者がイギリスに多いのは、ブラッグが女性研究者を育て、世に送り出したことに端を発しているのである。

4.2. ダブル・スタンダードの束縛

すでに述べたように、ノーベル賞受賞第一世代の３人は夫とともに受賞しているが、第二世代の３人（メイヤー、ホジキン、ヤーロウ）は、それぞれ夫とは別に独自に研究し受賞している。そして、ここまでの６人に共通しているのは、いずれも結婚して子どもをもったということだ。女性がこの時代において社会で認められ顕彰されるためには、まず良き妻、良き母であることが重視されたのではないかと思われる。その意味で、ダブル・スタンダードの縛りはかなり強かった。

実際、ノーベル賞を受賞して当然とされるほどの研究をしながら、受賞し

ていない独身研究者が何名かいる。もっともよく引き合いに出されるのが、リーゼ・マイトナーである。ドイツの核物理学者マイトナーの名前は共同研究者オートー・ハーンの名とともに、何度もノーベル賞候補に上げられ、1939年の核分裂理論の解明は、彼女の評価を決定的にするはずだった。しかしノーベル賞は1944年にハーンが単独で受賞した。ノーベル賞は1部門で3名まで同時に受賞できるにもかかわらず、マイトナーの名前はついぞ挙げられず、彼女は終生ノーベル賞の栄誉に輝くことはなかったのである。

最初の受賞者6人にしても、マスコミの扱いを見ると、彼女たちがいかに家庭の主婦として有能で、妻や母として立派であるかが熱心に書きたてられた。彼女たちは世界的な科学研究のみならず、普通の女らしい仕事にも有能であることが強調されてきた。したがって男性科学者が実験室や研究室で写真におさまっているのに対し、女性科学者は台所で写真が撮られることになる。新聞の見出しも、メイアーの場合は「サンディエゴのお母さんノーベル賞受賞」、ホジキンの場合は「イギリスの妻、ノーベル賞受賞」というもので、メイアー博士とかホジキン博士とは呼ばれていない。

1977年に受賞したヤーロウに至っては、すでにフェミニズム運動がかなり盛んになっていたにもかかわらず、「彼女は料理し、掃除し、ノーベル賞をとった」と書かれた。これは、見出しにありがちな誇張だろう。たしかに料理や掃除もしたかもしれないが、日常の家事全般に責任を負っていてノーベル賞を受賞するのは困難と考えられる。ほとんどの時間は研究に専念していたに違いない。メイアーは2人、ホジキンには3人の子供がいたが、彼女たちがずっと子育てにタッチしていたわけではなく、多くの部分をお手伝いさんに頼んでいた。マリー・キュリーの場合も、ピエールの父が子育てや家事を援助してくれたのである。

家庭と仕事の完全な両立がなされたかのごとく言うのは、若い女性が科学研究に参入する際の重荷となるだろう。援助なしに基本的にはできないはずのことと考えたほうがよい。

1980年代になって、そろって医学・生理学賞を受賞したマクリントック、モンタッチーニ、エリオンの3人は、生涯をたまたま独身で過ごした女性た

ちである。フェミニズム運動の高まりから、ようやく1980年代になって、独身の女性にも顕彰の機会が訪れたと言えよう。マリー・キュリーが30歳代で受賞し、他の女性たちはすべて50代歳で受賞しているが、マクリントックは81歳、モンタッチーニは77歳、エリオンは71歳など、いずれも高齢での受賞である。マクリントックの場合は研究の価値が容易に理解されなかった側面があっただろうが、もっと早い時期に価値が分かっていたとしても、ダブル・スタンダードの縛りがまだきつかった80年代以前の受賞は難しかっただろう。

1995年にクリスチアネ・ニュスライン=フォルハルトが、女子の高等教育がもっとも遅れていたドイツに初のノーベル賞をもたらし、2004年には、アメリカ女性が受賞した。ノーベル賞を受賞した女性というのは、女性科学者の中でも特別な存在ではあるが、最初の9人について3人ずつ時代を区切って彼女たちの人生をみると、女性研究者が置かれた状況を時代ごとによく物語っている。

5. 文化に染み込んだジェンダー・バイアス

1992年に、おしゃべりするタイプのバービー人形が発売された。いくつか組み込まれたセリフの1つが、"Math class is tough!"(数学は難しいわ)であった。すぐさまアメリカではクレームがつき、そのセリフを埋め込んだ人形は回収された。製造元のマテル社の経営最高責任者は女性だったにもかかわらず、そういうセリフが組み込まれてしまったのである。就学前の幼い女の子が、自分を投影したり同化したりして遊ぶ人形に、なぜわざわざ「数学は難しいわ」というセリフを言わせたのか。金髪の可愛い女の子は数学が苦手という思い込みがあるのだろう。

日本のリカちゃん人形も、白樺学園5年生という設定で、音楽と美術が得意で算数が苦手だったという。製造元のバンダイのお客様センターに聞いたところ、今は違うが、かつてはたしかにそういう設定になっていたという。なぜ女の子向けの人形は算数が苦手なのか、

また最近ハーヴァード大学学長のローレンス・サマーズは「女性が理数系

を苦手とするのは、何か女性特有の資質に由来するのではないか」と発言して大変顰蹙を買うことになった。すぐさま彼は謝罪することになったが、そうした思い込みはいまだに文化の中に染み込んだかたちで、ときに姿を現すようだ。これを全面的に取り除くのは相当難しいだろう。

《挿絵の出典》

図1，2　N. R. ハンソン『知覚と発見』上　渡辺博・野家啓一訳　紀伊國屋書店　1982年。

図3　Gunnar Johannson, "Two Figures Dancing in Dark," *Scientific American*, June, 1975.

図4　ジョン・バークレー『人体の骨の解剖』1829年　王立エディンバラ外科大学による。

図5　ロンダ・シービンガー『女性を弄ぶ博物学』小川眞里子・財部香枝訳　工作舎　1996年。

図6　「若いポンゴあるいはオランウータン」ピエール・ラトレイユ『猿に関する博物学』1801年　クレンドニング医学史図書館による。

〈質疑応答〉

―― 女性科学者の苦労はよく分かったが、現状がどうなのかについての指摘がなければ、昔の苦労話だけになってしまうような気がする。

小川　女性科学者がどのような歴史を負って存在するようになったのかを知ることは無意味ではないと考えています。女性科学者の苦労は、今もその延長線上にあると言ってよいでしょう。その際、彼女たちが妻や母としての女性的役割と超一流の研究者とを見事に両立したと言い立てることが必ずしもよいとは思いません。確かに彼女たちは努力し苦労したに違いないにしても、一切の援助なく家事や育児と世界的

な研究とを両立したわけではないのです。「彼女は料理し、洗濯し、ノーベル賞をとった」というキャッチが一人歩きすることが好ましいとは思えません。女性が存分に仕事や研究をしたければ、家族や外部サービスに頼らざるを得ないが、それについては批判されがちです。しかし仕事や研究で立派な業績を上げている既婚男性で、生活面に大きな責任を求められている人がいるでしょうか。

―― ジェンダーは社会的に作られているが、やはり男と女の脳の違いはあるという説もあり、男は数学が得意だという論調にもつながる

小川　男と女の脳の違いはさまざま解説されていますが、私はあまり根拠があることとは考えていません。私は、個性は性を越えると考えています。性で何かが決まるより、個性が上回るだろうと。女性でも数学がきわめて得意な人もいるし、18 世紀から 19 世紀にかけては、今よりずっと数学で活躍している女性が多いのです。20 世紀になって、女性は数学が苦手という意識が浸透していますが、過去に遡れば状況はずいぶん違います。

―― 今後は具体的にどうあることが望ましいか。

小川　多様な科学者の活躍で、多様な価値を反映する科学であってほしい。霊長類の研究など、女性科学者の参入によって、研究の多様性が広がっている領域もいくつかあります。

―― ノーベル賞の選考委員会が社会全体のジェンダー・バイアスを受けたという実証的な研究事例はあるのか？

小川　ノーベル賞選考委員会自体の問題というより、社会的な評価として、ダブル・スタンダードの縛りが大きかったのではないかと思います。そこをクリアしている女性でなければ、ノミネートされるところまでもいかないと。はっきりした実証研究があるわけではありませんが、十分ノーベル賞を受賞してもおかしくないのに、独身であったがゆえに受賞できなかったと思われる例がいくつかあり、その比較を通じて

そのように考えられる、ということです。

―― リーゼ・マイトナーが受賞しなかったのは、一説にはユダヤ人だからと言われている。だから、独身だからという理由以前に、民族の問題があるかもしれないので、その実証的研究は必要だろう。